

中学校国語科 ICT を使った「枠組み作文」の授業構想

—— 教職課程国語科教育法の授業において ——

My Lesson Ideas of “Outline Writing” Using ICT in Junior High School Japanese Language Classes

—— In the Teacher Training Course,
Japanese Language Education Method Classes ——

小 寄 麻 由

Mayu OZAKI

（要旨）

中央教育審議会が2021年にまとめた『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）では、ICTを「学校教育の基盤的なツール」「必要不可欠なツール」としている。これまでの教育実践を生かしながら、具体的にどのようにICTを活用すればよいだろうか。2021年度国語科教育法「書くこと」についての講義において実施した「枠組み作文」という方法を、2022年度、2023年度は学習支援ツール「ロイロノート」を活用して大学生に体験させた。その内容を報告し考察する。

キーワード：国語科教育、国語科教育法、書くこと、ICTを活用した授業、枠組み作文

1. はじめに

中央教育審議会は2021年『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）¹をまとめた¹。そのなかで ICT の活用に関する基本的な考え方として、ICT を社会構造の変化に対応した教育の質の向上における「学校教育の基盤的なツール」「必要不可欠なツール」としている（p.30）。また今後教育における ICT の活用が特別なことではなく「当たり前」のこととなるようにし、児童生徒自身が ICT を「文房具」として自由な発想で活用できるよう環境を整え、授業をデザインすることが重要だと述べ、「従来はなかなか伸ばせなかった資質・能力の育成」にも ICT は有効であるとしている（p.31）。一方で、ICT を活用すること自体が目的化してしまわないよう留意する必要性にも言及し、ICT をこれまでの実践と最適に組み合わせ有効に活用する、という姿勢で臨むべきであるとしている。

このことについて今宮（2023）は「従来と比較して ICT 活用で行った方が効率的であるものと、今までは実現できなかった学びを模索するために ICT 活用が推進されていると解釈できる。従って従来のものを否定するだけではなく、従来からあるものを活かしながら、その良さを残して取り組むことが求められていると言っているだろう」（p.16）と述べている²。

これまで行われてきた多くの優れた教育実践を生かしつつ、今後は文房具として当たり前前に教室に存在する ICT を具体的にどのように活用するのか、国語科「書くこと」の実践から考察する。具体的には2021年度の国語科教育法の「書くこと」の講義で実施した「枠組み作文」という方法を、2022年度、2023年度は学習支援ツール「ロイロノート」を活用して大学生に体験させた³。この時学生は個人のスマートフォンやタブレットにロイロノートのアプリをダウンロードして授業に参加し作品を提出した。その取り組みを報告する。

2. 中等教育国語科における「書くこと」の指導

(1) 学習指導要領における国語科「書くこと」の指導

2017年告示の『中学校学習指導要領解説 国語編』における「書くこと」の指導事項には「題材の設定」「情報の収集」「内容の検討」「構成の検討」「考えの形成」「記述」「推敲」「共有」の8つの項目があげられている⁴。このうち特に「考えの形成」は、自分の考えを形成する学習過程を重視する狙いから、今回の改訂で「話すこと・聞くこと」「読むこと」を含めた、すべての国語科の指導領域に追加された項目である。具体的には、第1学年では「根拠という概念があることを理解した上で、根拠を明確にしながらか」、第2学年では「根拠が自分の考えを支える上で適切かどうかを考えながら説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど」、第3学年では「表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなどして記述すること」を示している。

一方、2021年6月に示された「国語科の指導における ICT の活用について」では、「ICT 活用はあくまで手段であり、活用にあたっては、育成を目指す資質・能力との関連を明確にすることが重要である」と述べ、上記の学習指導要領における指導項目に付記する形で活動場面が示されている⁵。ここで想定されている活動場面は「情報を収集して整理する

場面」「自分の考えを深める場面」「考えたことを表現・共有する場面」「知識・技能の習得を図る場面」「学習の見通しをもったり、学習した内容を蓄積したりする場面」以上の5つの場面である。

つまり、国語科「書くこと」の指導に置いて留意すべきなのは、あくまでも「書くこと」として育成したい資質・能力、指導事項を設定したうえで、ICTを活用することがより効果的であると判断できる場面では積極的にICTを活用していく、ということになる。ICTを活用することが目的ではなく、生徒に「書くこと」の力をつけるためにどう活用するのが効果的か、ということを考えていく、という点を見失わないようにしたい。

(2) 「書くこと」の学習経験

中学校国語科の教員免許取得を目指す3年次生に対して、「国語科教育法Ⅱ」という講座を通年で担当している。2021年度のこの講座で「書くこと」の指導項目について学習する際、自身の中学校および高等学校の国語の授業で「書くこと」の活動がどの程度あったかを尋ねた。回答は「頻繁にあった」「時々あった」「ほとんどなかった」の3件法で、履修生12名のうち2名は「頻繁にあった」、9名が「時々あった」、「ほとんどなかった」と答えたのは1名であった。したがって「書くこと」の活動を経験していると感じている学生が多い。しかしその後「書くこと」の指導内容や指導方法を紹介すると、以下のような感想がみられた。

- ・今までの中学、高校の授業を振り返ると、「書くこと」の活動が少なかったように感じます。一番印象に残っているのは、修学旅行での出来事について短歌を創作したことでした。他には、作品について鑑賞文を書くことぐらいしか記憶に残っていません。
- ・自身の経験を振り返ると、高校で「書くこと」の指導が少ないように感じた。文章の読解や作者の心情などを考える機会は多かったが、作文やレポートなどはほとんどなかった。バランスよく指導していくことが大切だと感じた。

例えばこれらの学生が過去に受けてきた中高の授業において「読むこと」「話すこと聞くこと」の学習に「書くこと」が内包され、学習者が意識せずに「書くこと」の力を養う授業がなされていた、ということも考えられる。しかし上記のような学生の感想を読むと、与えられたテーマの作品を書いて提出、という指導に留まり、「どのように書くか」という指導や、書いたものを共有したり評価し合ったりする活動は十分だったのか、大いに疑問である。同じように大学生を対象とした「書くこと」の指導に関しては、矢部（2022）が2021年に行った調査がある⁶。北海道文教大学に在学する大学生334人を対象にしたこの調査では、中学生時代に最も書いてきた文章は「行事作文」が54%、「読書感想文」が28%だったという。一方で大学生が学びたい文章は「自分の意見や主張を述べる」文章で、全体の82%がこの選択肢を支持したという。以上のような実態をふまえ、「書くこと」の指導方法の例として「枠組み作文」を学生に紹介し体験させた。

3. 「枠組み作文」とは

「枠組み作文」は澤田英史、田中宏幸が実践してきた指導法である⁷。既存の文章の「枠組み」を借りてきて、それを「型」として使い、原文の、ものの見方や論の進め方に倣いながらも自分のテーマで作文を書く方法である。学習者は与えられた文章をモデルとして、独自の論を展開できる。制約があるからこそ自由な発想で書くことができるのである。一見矛盾しているように思われる方法だが、実際にやってみると、非常に豊かな作品が生まれることに驚かされる。

表現の型の利用について田中は、「猿とした思いや考えがあってもうまく言語化できない時に『書き出し例』や『論の展開例』を教えてもらえると、それが誘い水となって、堰を切ったように言葉がでてくるといことがある」(p.76)と述べ、「枠組み作文」の特徴について、「学習者自身の『思い』の言語化を促し、自己肯定感を育む学習」(p.78)だとしている⁸。

また「枠組み作文」は論理的な表現力の育成に繋がる指導法である。松崎史周は「論理的表現力の育成にあたっては、論理関係や思考・判断を表す『思考に係る語句』に着目して、説明的文章を読んだり書いたりしていくことが欠かせない」(p.6)と述べている⁹。「思考に係る語句」については『小学校学習指導要領解説国語編』に詳しい記述があるが、論理関係を示したり筆者の考えを表したりする語句や言い回しのことである¹⁰。これらは品詞の働きを中心に上げる学校文法の学習では指導しにくい。さらに説明的な文章の「読むこと」の指導において論理的な表現に注視させる指導は多いが、本当に論理関係を示す語句が理解でき自分のものになったかどうかは、書いてみて初めてわかるのではなかろうか。筆者の論理的思考を示す語彙や文脈を借りて作文を行う「枠組み作文」は、まさに「思考に係る語句」の働きに着目した「書くこと」の力をつける指導法である。

先に挙げた中学校学習指導要領解説における1年生「書くこと」の事項の詳細には「構成の検討」として「書く内容の中心が明確になるように、段落の役割などを意識して文章の構成や展開を考えること」や「考えの形成、記述」として「根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること」などがあげられている。「枠組み作文」は新しい学習指導要領に挙げられている「書くこと」の指導事項を実現するに資する指導方法であり、今後教員を目指す学生が自分の授業にも生かすことができる方法である。

4. 「枠組み作文」でコロナ禍を説明する

(1) 講義の流れ

2021年度に「国語科教育法Ⅱ」(3年次生担当)の「書くこと」の指導の授業のなかで「枠組み作文」を行った。教材として使用したのは、三省堂中学校教科書『現代の国語1』説明文、上田一生の「ペンギンの防寒着」である。コロナ禍のため、遠隔会議システム Zoom によるリアルタイムで授業を実施した。当日の講義の流れは以下の通りで、()内はおよその使用時間である。

- ①「書くこと」の指導項目を学び、実践例を紹介する。(30分)
- ②「ペンギンの防寒着」を音読させる。(10分)

- ③この説明文の特徴は何か、「読むこと」として何を指導するかを考えさせる。（10分）
- ④「読むこと」を「書くこと」へと展開する方法として、「枠組み作文」を紹介する。（10分）
- ⑤「枠組み」と「例」を示し各自作文を書く。次時までにネット上で課題提出。（20分）
- ⑥この講義の振り返りを記入する。（10分）
- ⑦次時の講義で互いの「枠組み作文」を鑑賞する。

（2）学習材に対する考え方

三省堂教科書『現代の国語1』「ペンギンの防寒着」は、中学生になって初めての説明文の学習であり、短く平易でありながら、説明文としての基本的要素がふんだんに盛り込まれている文章である。またこの後の説明文「クジラの飲み水」の学習のための練習教材という位置づけになっている。全体は明確に「序論・本論・結論」に分かれており、序論と本論、本論と結論は、それぞれ一行の行間を設け、視覚的に示されている。この他、明確な問題提起の文、読者に想像を促す比喻による説明、順序立てた説明を行うためのナンバリング、数字など根拠を挙げた説明の方法、序論を受けた結論の提示など、説明文の典型的な「枠組み」を示す教材として活用できる点がいくつかある。

この説明文を使って、説明文の指導は大いにできるが、学習者にそれらが身に付いたかどうか、自分のものにできているかどうかを確認させるため、「書くこと」と学習へ展開したい。「思考に係る語句」として「～なのでしょうか」という問題提起の言い回しや「1つ目は～、2つ目は～」といった複数の情報を並べるナンバリング、「いわば～というわけです」という結論に係る語句がみられる。これらを使って「枠組み作文」という指導方法による短作文の実践を行った。

なお、「ペンギンの防寒着」には内容的にも「枠組み作文」を書くのにふさわしい点があった。受講していた学生は大学に入ってからすぐコロナ禍による遠隔授業を強いられ、登学が制限されたという経験を持つ。「ペンギンの防寒着」は極寒という厳しい環境に住むペンギンが、いかに自ら環境に適応して暮らしているかを説明している。この説明文の学習の出口として、その型を借りた「枠組み作文」を書き、コロナ禍を説明する短作文を書いて共有することで、互いの文章に共感したり評価したりできるのではないかと考えた。

（3）枠組みの提示と大学生の作品

「ペンギンの防寒着」の説明文としての特徴を学習し「読むこと」の指導の要点を捉えた後、学生には「ペンギンの防寒着」の枠組みを次のように示した。これは「ペンギンの防寒着」という説明文全体の構成を枠としてとらえている。（A）に入る言葉は各自で考えさせた。授業で発表することを伝え、読み手は学習者である学生同士であることを想定させた。

(A) は、() という厳しい中で暮らしています。
(A) は、どのようにこの厳しい暮らしをしのいでいるのでしょうか。
一つ目は() です。(説明) 二つ目は() です。(説明)
このように、(A) は
() という、いわば() で身を守っているというわけです。

授業での扱いが短時間であること、遠隔で行うということもあり、より明確に学習内容を伝えるため、創作例を先に示した。これにより、学習者は学習の到達点を容易に理解することができる一方で、自分の独自性を出しオリジナリティのある作品を考えるのではないかと予想した。

例

(2020年度、小学生) は、(コロナ禍で休校が3カ月に及ぶ) という厳しい中で暮らしていました。(小学生たち) は、どのようにこの厳しい暮らしをしのいでいたのでしょうか。
一つ目は(学校や塾からのオンラインによる教材の配信) です。(様々な教育機関からオンラインの動画配信などが行われ・・・)
二つ目は(「どうぶつの森」) です。(このゲームは・・・)
このように、(今、小学生) は(現実の世界からオンラインの世界へ) という、いわば(バーチャル生活元年を体験していた) というわけです。

この方法で学生が書いた短作文を3点紹介する。

私達は、新型コロナウイルスの流行という厳しい中で暮らしています。私達はどのようにこの厳しい暮らしをしのいでいるのでしょうか。
一つ目はマスクの着用です。他の人に移さないように、他の人から移されないように、私達は外出する時にマスクを着用します。今多くの企業がマスク製作に関わっています。熱中症対策をとって涼しく換気が効くマスクを開発している企業もあるそうです。
二つ目は情報収集です。今、ニュースやSNSでデマ情報が流れたり、詐欺が流行ったりしているそうです。デマに騙されないようにこのコロナ禍を過ごすには、情報を取捨選択する必要があります。
このように、私達は、マスクの着用や情報収集という、いわば自分自身でできることで身を守っているというわけです。

人々は、新型コロナウイルスによるアルバイト先の休業や、仕事の減少という厳しい中で暮らしています。人々は、どのようにこの厳しい暮らしをしのいでいるのでしょうか。

一つ目は、Uber Eats の利用です。コロナ禍により、家を出ずに飲食したいという人と、配達により生計維持したいという人のマッチングがおこり、双方にメリットがあるUber Eats を利用することで収入を得ています。

二つ目は、新型コロナにより求人が増えたり、シフトなどが減ったりしない業種への転職です。コロナ禍では、デリバリーなど持ち帰りを中心としたフードビジネスや運送業、医療福祉など、コロナによって需要が高まった業種も多くあります。コロナ禍を機に、アルバイト先の変更や転職をする人も多くいるそうです。

このように、人々はオンラインを活用したコンテンツやコロナ禍で需要が高まった企業に転職するという、いわば with コロナを受け入れた新しい生活様式で身を守っているというわけです。

僕は、食欲に打ち勝たなければならない、という厳しい中で暮らしています。僕はどのようにこの厳しい暮らしをしのいでいるのでしょうか。

一つ目は夜18時以降食わず早く寝ることです。18時までに夕食を食べ、早く寝ることによって空腹を感じる事が少なくなり、また睡眠時間も増えるので生活習慣がよくなり一石二鳥です。

二つ目は筋トレをすることです。腹筋や体幹トレーニングをすることによって、汗をかき、確実に痩せていくような気分になります。

このように、僕は、自粛期間ダイエットという、いわば健康的な生活を送ることで身を守っているというわけです。

(4) 授業後の感想

本実践終了後に学生が書いた感想のなかで、「枠組み作文」に関わる記述は次の通りである。

- ・ 枠組み作文はとても参考になりました。本文の内容を理解しておく必要があり、また文章の構成の仕方も自然に身につくので、私が学生の頃にやっておきたかった学習方法だと感じました。
- ・ 枠組み作文は説明文の構造が分かりやすく、理解させやすいという、独創性を見ることができる。また、何度もさせると説明文を書く力が付く。この方式を応用して説明文以外でも使えそうなので覚えておこうと思います。
- ・ 生徒が書いた作文は、生徒が書いて教師が読んで終わりではなく、良い作品は名前などを伏せた状態で紹介をするなどしてあげることで生徒のやる気も出すことができるのではないかと思います。「書く」ということの大切さを改めて感じる事ができました。

- ・「書く」ことは内容を本当に理解できているか、正しく読めているかということを確認できる学習活動であることがわかりました。インプットしたことを言語化し、書き残すことで頭の中が整理され、次のインプットに備えられているのだと思います。国語の指導では他の教科よりも、知識のインプットだけでなく、物語などを読むことで感情が動いたり、過去の自分を振り返ったりすることもあるので、それらを言語化できるシステムを授業に導入できればいいと思いました。なんとなく考えていることは上手く話すことはできません。言語化できて初めて話すことができるので、「書くこと」は「読むこと」と「話すこと」とセットになっていると思いました。

「枠組み作文」は概ね学生に好評であった。なお、「コロナ禍」というテーマで書けない場合は、別の話題でもよい、という指示を出した。コロナを話題にしたくない学生に対する配慮も必要ではないかと考えたし、他のテーマに発想を飛ばすことを妨げないようにもしたかった。その結果、学生の中には「赤毛のアン」や「新選組」「社会人のストレス」「地球」などといったテーマで「枠組み作文」を書いてきた者もいる。学生たちの書いた「枠組み作文」を次時の講義で紹介すると、大いに盛り上がった。同じ型でも発想が変わると全く違う説明文になることに皆驚いていた。学生の感想にもあったが、作品を紹介して学び合いを行うことは「書くこと」の指導で欠かせないものであることを指導者として実感した。

5. 学習支援ツール「ロイロノート」を使用した「枠組み作文」

(1) ICTを活用した「書くこと」

GIGA スクール構想の発表、コロナ禍、リモート授業経験を経て、学校現場で ICT を活用した「書くこと」の実践報告も散見されるようになった。例えば山岡 (2021) はエッセイを執筆する活動で、構想段階にロイロノートを使用するという高等学校の実践を報告している¹¹。その実践の一番の成果をとして山岡は「ICT を用いて構成を立てやすくしたことで、学習者自身に書くことに伴う情報の収集と整理の必要性を実感させることができたこと」としている。小学校で国語単元学習を実践する青山 (2022) は「1 人一台端末は国語単元学習を豊かにする」(p.2) と述べ、「1 人 1 台端末をもつことで、学習者はそれぞれの興味・関心に合った事柄や人を選んでアプローチしたり、情報を集めたりすることが容易にできる。また、収集した情報を試行錯誤しながら整理、精選する。気づきを他者と交流することで新たな考えを生み出す」(p.3) としている¹²。一方で初谷 (2022) は ICT を使って「書くこと」を指導することについて「手軽さや校正機能、コメント機能など、学習を促進する要因になる一方、学校現場からは『表現の吟味という点で手書きに比べて課題がある』といった声も聞かれる」(p.9) と述べ、そのような課題の要因が「学習者の『書くこと』の能力だけではなく、電子デバイスを用いて書くことのアフォーダンスによってもたらされる側面」(p.9) があるとし、検討が必要だとしている¹³。デバイス入力の手軽さがむしろ「書くこと」の課題を助長しているのではないか、という指摘である。

(2) ICT を活用した「ペンギンの防寒着」の「枠組み作文」

前項で述べたように、2021年度 Zoom で行った「枠組み作文」の実践は、「書くこと」の指導に有用だと感じる学生が多かった。ではこの「枠組み作文」を ICT を活用して実施できないだろうか。「枠組み」を示すことや、デジタル上で作文すること、書いた作文を共有することなど、「枠組み作文」は ICT を活用できる要素があるのではないかと考えた。これは2節(1)で示した国語科における ICT 活用場面の、「自分の考えを深める場面」や「考えたことを表現・共有する場面」にあたる。また逆に「書くこと」に ICT を活用した場合、どのようなデメリットが見えてくるのだろうか。

そこで2023年度の学生には、学習支援ツールロイロノートを使用した「枠組み作文」を実施した。ロイロノートは、シンキングツールという思考ツールのテンプレート23種類が画面上で使用できるようになっている。この中の KWL 表という思考ツールを使用した。ただし本来 KWL 表は「K：知っていること W：知りたいこと L：学んだこと」をまとめる思考ツールである。今回はその本来の使い方ではなく「序論・本論・結論」のまとまりを視覚的に示すために使用した。

教科書教材は2021年度と同様三省堂教科書『現代の国語1』掲載の「ペンギンの防寒着」である。2021年度は Zoom 上の Word 文書に枠組みを示し、宿題として作文を行ったが、2023年度は講義および学生の活動全てを対面でロイロノートを使用して行った。また「枠組み作文」の記入と提出もその講義時間内にロイロノート上で行ったうえ、その場でモニターに作品を投影し評価し合った。

(3) 講義の流れ

当日の講義の流れは以下の通りで、（ ）内はおよその使用時間である。

- ①「書くこと」の指導項目を学び、実践例を紹介する。(30分)
- ②「ペンギンの防寒着」を音読させる。(10分)
- ③この説明文の特徴は何か、「読むこと」として何を指導するかを考えさせる。(10分)
- ④「読むこと」を「書くこと」へと展開する方法として、「枠組み作文」を紹介する。(5分)
- ⑤「枠組み」と「例」を示し各自作文を書く。(15分)
- ⑥その場で学生の作品をモニターに投影して紹介し、評価する。(10分)
- ⑦この講義の振り返り (10分)

(4) 実際の画面

ロイロノートの思考ツールを使って示した「枠組み」の画面は以下の通りである。(図1)

結 論	本 論	序 論
このように、() A () は いわば () () という、 で身を守っているというわけです。	一つ目は () () です。 二つ目は () () です。	枠組み作文 (A) は、() という厳しい中で暮らして います。 (A) は、どのようにこの厳しい暮 らしをしのいでいるのでしょうか。

図1 ロイロノート上で提示した「ペンギンの防寒着」の枠組み

学生全員にこの思考ツールのテンプレートを指導者からその場で送信した。学生は送られてきたこのカードに直接入力し、「提出箱」に提出する。指導者のデバイスには学生の全作品が以下のようにマルチ画面の形で表示され、一度に閲覧できる。(図2) さらにこの画面を教室内のモニターに写し、全員で共有しながら評価することができる。



図2 ロイロノート上で全学生の作品を共有する画面

この中から学生の作品を2点紹介する(図3)(図4)。同じ枠組みでありながら、全く異なる話題を掲げ、自由な発想で論を展開していることがわかる。

結 論	本 論	序 論
このように、（ドラえもん）は（秘密道具）だけでなく仲間（という、いわば（本当に大切なもの）の中で生活をしているというわけです。	一つ目は（様々な秘密道具）です。 二つ目は（のび太くんや仲間との強い信頼関係）です。	枠組み作文 （ドラえもん）は、（のび太くんを良い未来に導かなければならない）という厳しい条件下で暮らしています。（ドラえもん）は、どのようにこの厳しい暮らしをしのいでいるのでしょうか。

図3 「枠組み作文」の作品1

結 論	本 論	序 論
このように、（私の地元）は（格安バスやセルフレジ）という、いわば（人々が生活しやすい工夫）で身を守っているというわけです。	一つ目は（電車）が通っていないところ（です。バスも一時間に本数がないため、自動車の免許の取得は義務です。だから、六甲市は神姫バスの料金を80円に統一し、地域の人が乗りやすい環境を作っています。 二つ目は（スーパードッグ）の買い物ができるところがないこと（です。町に唯一のスーパーも数年前に閉店し、買い物に行くために車で遠くまで出かけなくてはなりません。スーパーの数が減ってしまったので、ひとつのスーパーに多くの利用者があつまります。だから、スーパーではセルフレジなどを利用して、スーパーの回転率を上げる工夫をしています。	枠組み作文 （私の地元）は、（六甲市で、不便な田舎）という厳しい中で暮らしています。（私の地元）は、どのようにこの厳しい暮らしをしのいでいるのでしょうか。

図4 「枠組み作文」の作品2

(5) 説明文「情報社会を生きる ―メディア・リテラシー―」でICTを活用した「枠組み作文」の実践

2022年度は「ペンギンの防寒着」を使った「枠組み作文」を行う時間を確保できなかったため、学生による模擬授業の発展的な「書くこと」の学習として、短時間で「枠組み作文」を紹介した。使用した模擬授業教材は三省堂『現代の国語3』菅谷明子の説明文「情報社会を生きる ―メディア・リテラシー―」である。現在中学校国語科では、「知識・技能」の項に「情報の扱い方に関する事項」が新設され、「情報と情報との関係」「情報の整理」という2つの指導事項がある¹⁴。情報を読み書きする能力である、メディア・リテラシーに関する授業は積極的に扱いたい。菅谷明子の説明文には、主題である「メディア・リテラシー」について以下のように端的に説明している箇所がある。

メディア・リテラシーとは、メディアの特性や社会的な意味を理解し、メディアが送り出す情報を「構成されたもの」として建設的に「批判」する能力である。と同時に、自らの考えなどをメディアを使って表現し、社会に向けてコミュニケーションを図ることで、メディア社会と積極的につき合うための能力でもある。言い換えれば、メディアが形づくる「現実」を批判的に読み取るとともに、メディアを使って効果的に表現していく総合的な能力といってもよいだろう。

ここでは、「～とは～である。と同時に～でもある。」というテーマの2面性を表現する言い回しや、「言い換えれば、～とともに、～といってもいいだろう。」というように、言葉を置き換えてより分かりやすく伝える言い回しなどの「思考に係る語句」が使用されている。

この部分を使用して以下のような短作文用の枠組みを作り学生に提示した。

(テーマ)とは、(A)である。と同時に、(B)でもある。言い換えれば、(a)とともに(b)といってもいいだろう。

実際の授業では、枠組みと例文を次のようなロイロノートの画面で提示した(図5)。

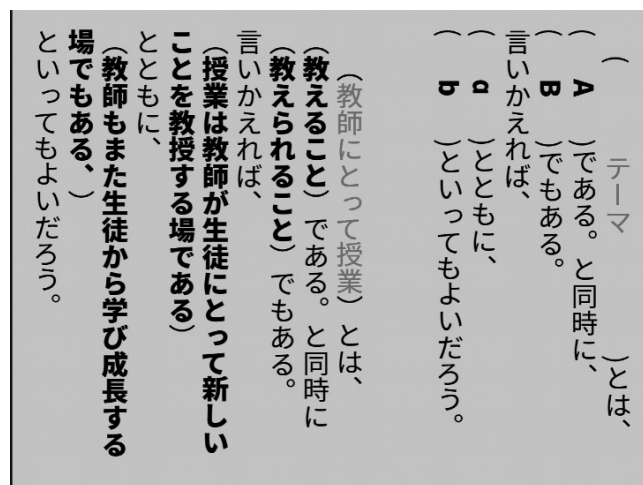


図5 ロイロノート上で提示した「メディア・リテラシー」の枠組みと例文

この枠組みで学生に作文を書かせた。ロイロノートに提出された学生の作品を2点紹介する(図6)(図7)。

（趣味）とは、（娯楽）である。と同時に、（自分探し）でもある。言いかえれば、（日頃の息抜きをする）とともに（自分の好きなものを追求して、生きがいを見つけること）といってもよいだろう。

図6 「枠組み作文」の作品3

（記号化）とは、（一般化する）ことである。と同時に、（固定すること）でもある。言いかえれば、（事柄を普遍化し、世界をわかりやすく捉えることである）とともに（世界的な事柄を静的に捉え直し、あるひとつの固定的な見方に留まること）といってもよいだろう。

図7 「枠組み作文」の作品4

6. 事後アンケートの結果と考察

(1) 「枠組み作文」について

回答はロイロノートのアンケート機能を使用した（2022年12月13日実施 n = 12）（表1）。

ほとんどの学生が「枠組み作文」に対してどの項目もよい評価をしている。しかし「書きにくかった」と答えた学生が1名いた。この学生は自由記述のなかで、枠にとらわれて難しく考えすぎてしまい、筆が進まなかったと書いていた。このようにデジタル入力による書く活動に違和感のある学習者が、一定数いることは念頭におかなければいけない。「書くこと」を促すために、この型で表現できることを丁寧に説明する、例を挙げる、友人の作品を参考にさせる、指導を重ねる、などの手立てを講じる必要がある。

次に「枠組み作文」についてどう感じたか自由記述で書かせたところ以下のような回答があった。全学生の、すべての記述について1文を1と数えてn = 21の内容を以下のカテゴリで分類したところ、出現は次のような頻度となった（表2）。

表1 「枠組み作文」についての質問項目と結果

質問内容	1	2	3	4	平均値
「枠組み作文」という方法で「書くこと」の指導は積極的に取り組める、書きやすい方法だと思うか	1	0	7	4	3.2
「枠組み作文」を実施することで「書くこと」や「読むこと」の目標や課題が分かりやすくなると思うか	0	0	5	7	3.6
「枠組み作文」という方法で生徒は独創的な表現ができると思うか	0	0	7	5	3.4
「枠組み作文」という指導は生徒の「書くこと」の力をつけるのに有効だと思うか	0	0	4	8	3.7
「枠組み作文」を実施することで「書くこと」の指導はしやすくなると思うか	0	0	4	8	3.7

表2 「枠組み作文」についての感想の自由記述

カテゴリー	件数	頻度	主な内容
書きやすいというポジティブな意見	10	48%	<ul style="list-style-type: none"> ・型があることで書くことが苦手な生徒は書きやすい。 ・実体験を書けるので書きやすい。 ・自由度が高い。
指導しやすいというポジティブな意見	6	29%	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな意見を並べて比較したり、人の意見を解釈したり容易にできる。 ・短時間で取り組ませやすい。 ・表現力の強化や試験対策に役立つ。
場合によっては書きにくいというネガティブな意見	4	19%	<ul style="list-style-type: none"> ・難しく考えてしまう。 ・高度な作品になりにくい。 ・思考の方向性が引っ張られる。
指導する場合には注意が必要という中庸な意見	2	9%	<ul style="list-style-type: none"> ・どこまでの制約を設けるかを指導者が見極めなければならない。 ・臨機応変に指導に使うべき。

学習者が書きやすい方法だとする意見に続き、指導者側が指導しやすいという意見が多いが、場合によっては書きにくい、実際指導する際には注意が必要、とする文も見られた。今回の「枠組み作文」の取り組みは、「書くこと」の指導をテーマにした90分の講義のなかの一部という短時間の実施であった。したがって扱った説明文の構造や言い回しのみを借りてくるといった程度の「枠組み作文」にとどまった。このため、出来上がった作品も深い内容のものにはなりにくかった。実際の国語科教育では、発達段階や学習経験によって、取り上げる説明文を変えたり、条件や制限を設けたりするなどして「枠組み作文」の難易度を変えて実施すべきである。

「枠組み作文」は兵庫県の高等学校における国語科「書くこと」の指導のなかで重ねられてきた指導法だが、今回の試みのように中学校教材でも実施することが可能である。また教材の選び方如何では小学校「書くこと」でも指導は可能ではないだろうか。ただし枠組みの元になる説明文の切り取り方、条件の付け方など指導者の見極めが必要になる。このことについて井上（2016）は『「枠組み作文」の成否は、学習者が意欲的に学び、自らの発見を可能にする枠組みを持った教材を開発する教師の力量にかかっている』（p.166）と述べている¹⁵。

なお、「枠組み作文」をロイロノートで書く活動を紹介した学生のなかに、2023年度後期

の自分の模擬授業に「枠組み作文」を取り入れた学生がいる。光村図書『国語1』『ダイコンは大きな根?』の指導において、本文の論理展開の要素、例えばテーマの提示や接続詞などを使って枠組みを作り、学習者が新しい説明文を書く活動を行った。このように指導経験の少ない学生でも、工夫次第で、「書くこと」の力を養うのに効果的な指導を実践することができる。

(2) ICTを使った「書くこと」の活動について

次にICTを使用した「書くこと」の活動について調査した。12名の受講学生に、自身の中学校・高等学校の時、どの程度ICTを活用した授業を受けて来たかを聞いたところ、「PCやタブレットを使用した授業はほとんどない」を選択したのは6名、「技術の授業でPCを使ったことがあるのみ」は4名、「デジタル教科書やプレゼンテーションソフトを使って資料提示の授業を受けたことがある」と回答したのは2名だった。半数の学生はPCやタブレットで授業をしたことがなく、授業で使ったことがある学生も、技術の授業、もしくは資料の提示としてデジタル教材を使用していただけで、今回のように「書くこと」の活動として、PCで作文や作品を入力したり、提出したり、共有したりした経験はないことがわかった。

さらに、ロイロノートで「書くこと」の授業についてどう思ったか、という質問については、「大変書きやすく、意欲的に取り組めた」が4名、「まあまあ書きやすかった」は7名、「あまり書きやすいとは言えない」は1名、「書きにくかった」を選択した学生はいなかった。平均値は3.3であった。学生は各自のスマートフォンかタブレットで作品を書き、提出したが、ICTで「書くこと」を「書きやすい」とする学生の方が多い。さらにICTを活用して「書くこと」のメリットとデメリットを自由に記述させたところ、学習者のメリットと指導者のメリットに分類できた（表3）。

表3 ICTを活用して「書くこと」のメリット

分類項目		記述内容の概略
学習者の メリット	①作業効率など	・意欲的に取り組める ・作業に取り掛かりやすい ・消す、改行する、文章を入れ替えるなどの作文作業が効率的に でき、推敲の回数を増やせる ・時間を短縮して他の人の意見を聞くことができる
	②思考内容など	・深く考えられる ・グラフなどの表現、ツールを使った思考方法などを知る機会に なる ・授業だけではない汎用的な力の育成ができる
指導者の メリット	①作業効率など	・課題が提示しやすい ・授業の効率化が図れる ・生徒作品を一斉表示できるのがよい
	②指導や評価など	・比較しやすい ・評価しやすい ・共有やまとめがしやすい ・書くことを視覚的にサポートできる、考える力を促すことが できる

学習者としても指導者としても、ICTならではの作業効率に関するメリットを指摘している。実際に、ICTを活用すると、非常に短時間で「枠組み作文」について説明すること

ができるうえ、書いた作文をその場で共有することも容易である。また学生が指摘するように、「書くこと」の活動が「思考」や「表現」といった力の育成に繋がる可能性を感じる。ただし、どの程度「思考力」「表現力」の育成につながるのかについて今回の調査では数値化できなかった。

デメリットに関する記述は以下の2点に分類できた（表4）。

表4 ICTを活用して「書くこと」のデメリット

分類項目	内 容
①作業上の誤作動	<ul style="list-style-type: none"> ・画面が小さく意図しない誤操作が多々あるので使い方には少しコツが必要。 ・紙より自由に使えない。
②文字の知識や技能の低下に対する懸念	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTばかりを使うことになるのではないか。 ・鉛筆やペンで実際に手で書く事が少なくなることによる漢字の知識や技能の低迷、文字を書くことへの影響がある。 ・実際に書くという能力がつきにくいと思うが、今後実際にペンで書くということが減っていくようにも思うので、時代に合わせていく必要がある。

スマートフォンやタブレットといった小さな画面で指による操作では思うようにいかない場合があり、そこにストレスを感じる学生がいる。初等中等教育の「書くこと」にICTを取り入れる場合も、デバイスの確保や操作スキルに注意が必要である。多かったのは文字、特に漢字の知識や技能への影響である。学生が指摘するように、デジタル入力の際の自動漢字変換機能や、次の語の予測変換機能は「書くこと」の能力に少なからず影響するだろう。ICTを使った「書くこと」の指導が、国語科における「書くこと」や「知識・技能」のすべての学習内容を網羅するものではないということは間違いない。したがって従来行ってきた手書きの漢字練習や作文は行いつつも、「枠組み作文」のようにデジタルで作成することの方が、取組みやすく指導しやすい活動についてはICTを使って積極的に指導を行っていく、ということになる。

7. おわりに

高等学校国語科における「枠組み作文」の教育的効果はすでに言われているところであり、4章で述べた「コロナ禍」の「枠組み作文」のように中学校教材でも効果的だが、この方法の知名度はそれほど高くない。しかし「枠組み作文」を大学の国語科教育法の講義で紹介すると、自分の模擬授業や教育実習でやってみたい、と書く学生が少なくない。実際に取り入れた学生もいる。さらに今回はICTを活用することで、指導者としても学習者としても「書くこと」の活動に取り組むことに対して抵抗感が低くなる傾向がみられた。これまで行われてきた優れた教育実践にICTを活用する方法を探るべく、今回の授業を行ったが、ここで考察できることは、「枠組み作文」を使って「書くこと」の指導を行う際、ICTを活用できれば、より「書くこと」の指導が容易になるということである。おそらく「枠組み」を視覚的に示したり操作したりすることが、ICTと親和性があるのではないかとと思われる。これにより、国語の授業で「書くこと」を扱う教員が増えることは、学習者

の学習機会が増えるということにつながる。また大学の国語科教育法としては、自身に「書くこと」の学習経験が少ない学生でも、将来「書くこと」の指導を積極的に実践できる国語科教員として育成することができる。

一方で松崎正治（2021）は「教育の EdTech 化は、ますます進行していく。その必要性が高いことも、私たちはコロナ禍の教育で実感した。しかし、何事にも光と影がある。私たちは、善意で光の部分を進めているつもりでも、知らないうちに影の部分を学習者に押しつけているかもしれない。」（p.31）と述べ、ICT による個別最適な学びが学習の格差を招く危険を指摘している¹⁶。ICT を活用した「枠組み作文」の指導についても、その影がどこにあるか、学生が挙げたデメリットなども参考にして丁寧に検証する必要がある。

注

- 1 文部科学省，2021『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して—全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学び、と協働的な学びの実現（答申）』
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（最終閲覧2023年11月20日）
 5章 「令和の日本型学校教育」の構築に向けた ICT の活用に関する基本的な考え方 p.30
 「令和の日本型学校教育」を構築し、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを実現するためには、学校教育の基盤的なツールとして、ICT は必要不可欠なものである。我が国の学校教育における ICT の活用が国際的に大きく後れをとってきた中で、GIGA スクール構想を実現し、4.（3）で述べたようにこれまでの実践と ICT とを最適に組み合わせることで、これからの学校教育を大きく変化させ、様々な課題を解決し、教育の質の向上につなげていくことが必要である。
 5章 （1）学校教育の質の向上に向けた ICT の活用 p.31
 ICT の活用により新学習指導要領を着実に実施し、学校教育の質の向上につなげるためには、カリキュラム・マネジメントを充実させつつ、各教科等において育成を目指す資質・能力等を把握した上で、特に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に生かしていくことが重要である。また、従来はなかなか伸ばせなかった資質・能力の育成や、他の学校・地域や海外との交流など今までできなかった学習活動の実施、家庭など学校外での学びの充実などにも ICT の活用は有効である。その際、1人1台の端末環境を生かし、端末を日常的に活用することで、ICT の活用が特別なことではなく「当たり前」のこととなるようにするとともに、ICT により現実の社会で行われているような方法で児童生徒も学ぶなど、学校教育を現代化することが必要である。児童生徒自身が ICT を「文房具」として自由な発想で活用できるよう環境を整え、授業をデザインすることが重要である。
- 2 今宮信吾，2023「国語科における ICT 活用の実際—小学校授業研究会を通しての一考察—」大阪大谷大学研究紀要47号 pp.15-24
- 3 開発元の LoiLo(株)の Web サイトによれば、ロイロノートは「思考力」、「プレゼン力」、「英語4技能」を育てる授業支援クラウドシステムで、学習者が主体的に学びあう双方向授業を実現できると紹介されている。プレゼンテーションアプリの機能、教材の配布、生徒の回答や成果物の回収、一覧確認などの機能を持つ。本学教職課程の授業にも利用している。
- 4 文部科学省，2017『中学校学習指導要領解説 国語編』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_002.pdf（最終閲覧2023年11月20日）
- 5 文部科学省，2020「国語科の指導における ICT の活用について」
https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_01.pdf（最終閲覧2023年11月20日）
- 6 矢部玲子，2022「多面的な見方・考え方をそだてるための文章指導に向けて」月刊国語教育研究 No.603 pp.4-9
- 7 井上雅彦，2016「論理的な文章（意見文・小論文）を書く—高等学校—」『中学校・高等学校「書くこと」の学習指導 実践史をふまえて』（溪水社） pp.161-181
 この論文のなかで井上は、兵庫県高等学校で実践を重ねた、澤田、田中両氏の「枠組み作文」につ

いて詳しく述べている。

- 8 田中宏幸, 2023「『国語表現』の授業作り—インタビュー・枠組み作文・評価と処理—」日本語学 vol. 42-1 pp.64-80
- 9 松崎史周, 2021「論理的表現力育成につながる語彙の指導」月刊国語教育研究 No592 pp.4-9
- 10 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』p.119
ここに「思考に係る語句」について以下のように示されている。
『しかし』のように情報と情報との関係を表す語句, 『要するに』のように情報全体の中でその情報がどのような位置付けにあるのかを示唆する語句, 『考える』, 『だろう』のように文の中の述部などとして表れる思考そのものに関わる語句などを指す。また, 『～は～より…』, 『～は～に比べて…』のように複数の情報を比べる場合や, 『～が～すると…』, 『～になった原因を考えてみると…』のように原因と結果の関係について述べる場合の言い方なども含まれる。これらの語句を, 話や文章の中で使うことができるようにすることが重要である。
- 11 山岡万里子, 2021「書くための情報収集と整理—ICTによる交流の可視化を用いて—」月刊国語教育研究 No594 pp.32-35
- 12 青山由紀, 2022「1人1台端末は国語単元学習を豊にする」月刊国語教育研究 No605 pp.2-3
- 13 初谷和行, 2022「電子デバイス・ICTを活用した『読むこと』学習の方向性」月刊国語教育研究 No605 pp.4-9
- 14 国語科教育におけるメディア・リテラシーの扱いについては、拙稿2023「中学校国語科「情報の扱い方に関する事項」に留意したメディア・リテラシー育成の授業構想—教職課程国語科教育法の授業において—」神戸学院大学教職教育センタージャーナル 第9号 pp.35-50を参照されたい。
- 15 前出7
- 16 松崎正治, 2021「〈個別最適な学び〉の社会的・歴史的文脈」月刊国語教育研究 No591 pp.28-31